

Title	フィリピン語を母語とする日本語学習者の授受表現の習得研究
Author(s)	アルカラ, アルミナ マンザノ
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49469">https://hdl.handle.net/11094/49469</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	アルカラ ALCALA,	アルミナ ARMINA	マンザノ MANZANO
博士の専攻分野の名称	博 士 (日本語・日本文化)		
学位記番号	第 22523 号		
学位授与年月日	平成20年9月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻		
学位論文名	フィリピン語を母語とする日本語学習者の授受表現の習得研究		
論文審査委員	(主査) 教授 鈴木 睦 (副査) 教授 津田 守 准教授 真嶋 潤子 教授 大上 正直 准教授 筒井 佐代		

## 論文内容の要旨

## 研究の目的

本稿の序論では、本研究の動機と目的を述べた。日本語の「授受表現」は、日本社会における「人間関係」にとって重要であり、日本語で丁寧さを示すために不可欠な表現の一つである。

しかし、外国人日本語学習者にとって、日本語における「授受表現」は難しく、適切に使用していない場合が多い。このため、日本語の授受表現に関する研究は多く、英語や中国語、韓国語等の外国語との対照研究も数多く存在する。

フィリピン人日本語学習者にとっても、日本語の授受表現は難しく、学習レベルが上がっても、授受表現に対する誤用が見られる。フィリピン人日本語学習者の授受表現に対する困難は、フィリピン語と日本語の授受表現における要因の相違に起因すると考えられるが、フィリピン語と日本語における授受表現に関しては未だに研究がないようである。

本研究は、フィリピン人日本語学習者における日本語の授受表現習得を援助することを目的とし、フィリピン人日本語学習者における日本語の授受表現の習得に関して調べた。本研究では、日本語の授受表現とフィリピン語の授受表現を比較し、両言語の授受表現の相違点を調べ、その相違点が学習者の日本語の授受表現の習得にどのような影響を与えるのかを観察する。そして、授受表現に関する調査を行い、フィリピン人日本語学習者の授受表現の習得における問題点を調べる。最後に、調査結果から、フィリピン人日本語学習者の日本語の授受表現の習得に関して、いくつかの提案を行う。

## 論文の構成

本稿の第1章では、日本語における授受表現の先行研究と理論的背景に関して述べた。続く第2章では、日本語の授受表現の習得研究の結果をまとめ、習得研究の分野の先行研究をまとめ、坂本・岡田(1996)の提案、田中(1996,1997,1999,2001,2004)の提案、そしてアハammad(2006)の提案を紹介した。その後、フィリピンにおける日本語教育の現状を記述し、フィリピンの大学で使用されている日本語教科書において、授受表現がどのように扱われているかを見た。第3章では、フィリピン語における授受表現の構造と機能に関して述べた。第4章では、日本語とフィリピン語における授受表現を比較し、両言語の違いを分析した。その結果、日本語の授受表現では、視点、ウチとソトの関係、上下関係、そして恩恵が重要であるが、フィリピン語の場合は動詞の形、焦点、そしてトピックが重要であることが明らかになった。第5章では、本研究の基礎となったAlcala(2005)のフィリピン人日本語学習者の授受表現の使用に関す

る調査結果を紹介した。第6章では、本稿における本調査の概要と言語テストの内容を説明した。第7章では、本調査の結果及び考察を述べ、「7.1. 本調査の全体結果」、「7.2. 各問題別(本動詞、補助動詞、敬語)の結果」、「7.3. 誤用分析」の順に、調査結果の分析を行った。第8章は本稿の終章であり、各章の内容をまとめて述べる。第8章の最後に、調査結果に基づいて、教育現場への提言を行う。

## 調査方法

本研究の調査方法は以下の二種類である。

1) 調査紙による言語テスト：絵を見て授受動詞を使った短い文を作成する日本語短文。

本調査期間は2006年12月から2007年1月の約1ヶ月間である。調査は、マニラにある3つの大学、フィリピン国立大学、アテネオ・デ・マニラ大学、そしてデ・ラ・サール大学において行った。

2) フォローアップ・インタビュー：中級学習者10名、指導教員3名に対する半構造インタビュー。言語テストによる結果を補足するために、調査対象者の中から、協力を得られた中級学習者10名に対し、言語テストの修了後に、筆者がフィリピン語を用いてインタビューをおこなった。

## 結果

本調査の結果は、1. 「全体の結果」、2. 「各問題別(本動詞、補助動詞、敬語)の結果」、そして、3. 「誤用分析」に分けている。本調査では、学習者の授受表現の正用と誤用だけでなく、授受表現を使用するかどうか授受表現の習得をさぐる重要な要因であると考え、「正答」「誤答」「無回答」「その他」の四つにわけて分析を行った。以下は各節の結果のまとめである。

## 1. 「全体の結果」

学習者全体の回答結果から、以下の四点が明らかになった。

- 1) 授受表現の問題では、非使用(無回答、その他)が全体の25.5%と多い。
- 2) 「無回答」は初級前半と初級後半で最も多く、フィリピン人日本語学習者はレベルが上がるにつれ、授受表現を使用するようになる。
- 3) 学習レベルがあがるにつれて、正答が増え習得が進む。正答と誤答だけに注目していると、初級前半より初級後半の方が、習得が遅れているように見えるが、授受表現の使用率は上がっており、実際には習得が進んでいると考えられる。習得は、「非使用が多い段階」→「使用するが間違いが多い段階」→「使用し、かつ間違いが少ない段階」という順序をたどる。
- 4) 問題別の結果(本動詞、補助動詞、敬語)では、学習者の授受表現の習得順序は、「授受本動詞」が最も習得しやすく、ついで「授受本動詞の敬語」、一番習得しにくいのが「授受補助動詞」という、田中(2005)等の先行研究を支持する結果となった。学習者にとって、「物の授受」は「行為の授受」より習得しやすいと言える。

## 2. 「各問題別(本動詞、補助動詞、敬語)の結果」

本調査の問題は、1) 「授受本動詞に関する問題」、2) 「授受補助動詞に関する問題」、3) 「授受本動詞の敬語に関する問題」に分類する。各問題の結果のまとめは、以下の通りである。

## 1) 「授受本動詞に関する問題」の結果

調査問題の下位分類の正答率だけではなく、誤答率、「その他」「無回答」とを合わせて考察すると、「話し手(私)が授受の与え手又は受け手である授受本動詞」が、「話し手(私)が授受の与え手又は受け手でもない授受本動詞」よりも習得がやさしく、以下の習得順序になる。「①あげる>②くれる・もらう、④3人称同士の問題(ソト)>③3人称同士の問題(ウチ)」学習者にとっては、「私(話し手)が与え手である①「あげる」に関する問題が最もやさしく、視点移動について考える必要がある③3人称同士の問題(ウチ)が難しい。

## 2) 「授受補助動詞に関する問題」の結果

初級後半の学習者は「授受補助動詞」を学習してまだ時間がたっていないため、この段階では、「補助動

詞を使わない学習者が多く、誤答も多い。中級、上級と進む間に、まず無回答が減少し、まだ間違いはあるが補助動詞を使ってみる段階を経て、正しい使用へと変化していくのであろう。

授受補助動詞に関する問題の各下位分類における学習者の正答率を見ると、③「私」(話し手)が授受の与え手又は受け手ではない「3人称同士の問題(ソト)」の正答率(45.1%)が最も高く、次に、①「私」(話し手)が与え手となる「てあげる」に関する問題の正答率(41.5%)が続くが、③と①には大きな差はない。②「てくれる」と「てもらう」に関する問題の正答率(29.6%)が三番目で、③授受の与え手又は受け手が「私」(話し手)の身内となる「3人称同士の問題(ウチ)」の正答率(27.8%)が最も低い。

### 3) 「授受本動詞の敬語に関する問題」の結果

「授受本動詞の敬語に関する問題」における各学習レベルの結果を見ると、初級後半では、誤答が多く無回答もあるが、中級になると学習者の正答率が大幅に上がり、「授受本動詞の敬語」が上手く使用できるようになる。しかし、上級になっても、誤答が26.7%も見られ、中級以降の変化が見られないという特徴がある。上級に誤答が多いという点については、誤用分析の結果をみる必要がある。

### 3. 「誤用分析」の結果

「誤用分析」の結果も、「各問題別(本動詞、補助動詞、敬語)の結果」と同様に、1)「授受本動詞に関する問題」の誤用、2)「授受補助動詞に関する問題」の誤用、3)「授受本動詞の敬語に関する問題」の誤用に分けて考察した。

授受本動詞の問題の誤用は、①授受本動詞選択の誤用、②視点移動制限の誤用、③助詞の誤用、③a. 授受の方向を逆にした誤用、③b.不適切な助詞を使用した誤用、そして ④授受本動詞の活用の誤りの4種類に分類された。

### おわりに

終章で、フィリピン人日本語学習者の授受表現の習得における問題点を取り上げ、それらに基づいて教育現場への提案を2つ挙げる。

1) 授受本動詞の導入は、媒介語を使用するなら、授受本動詞「あげる」、「くれる」、「もらう」を英語の 'Give' と 'Receive' に対応させるのではなく、フィリピン語の方向焦点 'Binigyan' を使用して「あげる」、「くれる」と「もらう」の方向性を説明する。

2) 『みんなの日本語』における「授受表現」の提出方法に従って、①-③の解説を導入する。

① 第7課では、「もの」の「移動」の方向性の制限を強調する。

第7課では、「あげる」と「もらう」の導入を行い、「あげる」と「もらう」における「方向性」の制限をしっかりと説明する。「あげる」と「もらう」の方向性を説明するには、上の1)の提案を使用することができる。

② 第24課では、「授受表現」をシステムとして説明し、日本語における「ウチとソトの関係」の導入をする。「ウチとソトの関係」の説明では、「視点移動」の制限も説明し、「3人称同士」における「授受表現」もこの章で導入することができる。そして、「授受補助動詞」の導入では、「恩恵」の説明を強調する。

③ 第41課では、「授受表現」における「上下関係」を説明し、日本語の授受表現における上下関係は、フィリピン語と異なり、「話し手」と「受け手」の間における「上下関係」ではなく、「話し手」と「与え手」の間関係であることを理解してもらおう。

### 論文審査の結果の要旨

### <論文の概要>

日本語の授受表現は、日本語学習者にとって習得が困難な指導項目のひとつとして知られている。英語のgiveに対応する授受本動詞だけでも、「あげる」「くれる」「やる」「さしあげる」「くださる」の5つが存在し、与え手と受け手のウチ・ソトの関係を考慮して動詞選択を行わなければならない

い。さらに、習得を困難にするのは、日本語においては「田中先生が私に日本語を教えました」のように事態のみを表した文は不適切であり、「教えてくれた」「教えていただいた」「教えてもらった」などのように、授受補助動詞を用いて話し手の事態に対する態度を表す必要があるという点である。

アルカラ氏は、フィリピン語を母語とする学習者を調査対象として、日本語の授受表現習得についての困難点を明らかにすることにより、フィリピンにおける授受表現の指導方法を改善するための基礎研究とすることを本論文の目的としている。日本語の授受表現に関する研究は多く、英語や中国語、韓国語等の外国語との対照研究も数多く存在するが、本論文は、授受表現に関するフィリピン語との対照研究としても、フィリピン語を母語とする学習者に関する授受動詞の習得研究としても恐らく最初の論文であり、本学大学院で研究するに相応しい論文であると言える。分析枠組みとしては、中間言語理論を用い、量的研究ではあるが質的研究の側面をも加味した横断的研究となっている。学習者の母語と目標言語との対照研究は中間言語研究の一部分であるという位置づけをとっている。

### <論文の構成>

本論文の構成と概略は以下の通りである。

第一章：日本語の授受表現に関する文法研究の分野における先行研究と理論的背景の考察。

第二章：第二言語習得の分野における先行研究の考察。

第三章：フィリピン語における授受表現の構造と機能の分析。

第四章：フィリピン語と日本語の授受表現の対照。

第五章、第六章、第七章：調査方法と分析結果。

第八章：論文全体のまとめとフィリピン語を母語とする日本語学習者への授受動詞の指導方法についての提言。

調査対象：マニラにある三大学の初級から上級までの日本語学習者97名である。フィリピンの日本語教育は、初級学習者が圧倒的に多いという特徴をもっており、日本語主専攻、副専攻を持つ大学は少なく、また授受表現に関して学習が終わっている初級後半以降の学生が少ないという特徴があり、そのような条件下で97名の被験者を得ることができた点は評価できる。

調査方法：授受表現に関して、与えられた絵を見て短文を作成するという調査紙法による文法テストと、どのように考えて動詞を選択したのか、どのように教科書や教室内で説明を受けたのかを尋ねるフォローアップインタビューの2種類の調査を行なっている。

調査項目：調査項目は、本動詞、補助動詞、本動詞の敬語の形の三種に分かれており、学習者の日本語のレベルによる習得の段階や誤答の傾向の違いが詳しく比較検討されている。

### <論文の結論>

第3章および第4章では、フィリピン語と日本語の対照研究の観点から、両言語の授受表現における相違点等について考察している。日本語の場合は、「視点」「ウチとソトの関係」「上下関係」「恩恵」といった面が重要であり、社会的・文化的コンテキストの中で理解しなければならないのに対し、フィリピン語の場合には、動詞の形態、焦点およびトピック(主題)といった言語形式面だけが重要な要素となると述べている。

特に、2005年に行った調査では、フィリピン語母語話者が授受表現を使う場合、「物」に焦点があたるだけで、「与え手」が現れず、目的語を一つしかとらない動詞であるtanggapin(「受け取る」)の目的焦点)ではなく、二重目的焦点動詞のbigyanを多用する傾向があることをデータにもとづき実証している。この調査結果は、フィリピン語母語話者が一般的な「物」の移動を「受け手」中心に考えているという傾向を知る上で極めて有益であり、大変貴重な資料であると言える。

全体の結論としては、学習者の授受表現の習得順序は、「授受本動詞」が最も習得しやすく、ついで「授受本動詞の敬語」、一番習得しにくいのが「授受補助動詞」という、田中(2005)等の先行研究を支持する結果となった。アルカラ氏の調査では、本動詞、補助動詞ともに、話し手が与え手でも受け手でもなく、かつ、与え手と受け手のウチ・ソトの関係を考慮しなければならない場合についての習得が最も遅れることが指摘されている。

アルカラ氏の分析の興味深い点は、正答率と誤答率だけでなく、授受動詞を使用しない「無回答」「その他」の数にも注目している点である。どの学習項目についても、初級から中級、更に上級へと

学習者の日本語のレベルがあがるにつれて習得は進むが、習得は直線的に進むのではなく、一時的に停滞したり、下降したりすることが既に知られている。本論文では、関連した他の学習項目が導入された後などに正答率は下がるが、誤答率はあがらないという現象が存在することが指摘され、正答率が下がるという現象の背景に、「無回答等の授受動詞を使用しない段階」→「使用するが間違いが多い段階」→「使用し、かつ間違いが少ない段階」があると結論づけている。正答率が伸びず、一見習得が停滞しているかに見える段階においても、水面下では習得が進んでいるという状態が伺われる。各問題は、更に詳しく考察され、先行研究にはない指摘がなされている。

アルカラ氏独自の新しい考察については、論文そのものに当たっていただきたいが、上級になっても「山田さんは、私に～もらった/～してもらった」のような、私が与え手である場合の「もらう」の誤用が残ることや、授受本動詞の敬語に関する問題については、中級段階で学習者の正答率が大幅に上がるが、敬語に関して知識を有しているはずの上級になっても中級以降の変化が見られないという結果等の指摘があり、その背景に、どのような要因があるかの考察がなされている。

#### <長所と欠点>

本論文は、調査結果を詳細に順序立てて記述するという方法をとったために、せっかく発見した興味深い事実が論文の各所に埋もれて目立たないという欠点をもっている。しかしながら、この欠点は、アルカラ氏の論文の長所でもある、謙虚で誠実な研究の姿勢からくるものであり、論文の価値を大きく損なうものではない。手堅い手法を用いて詳細に記述し、かつダイナミックな論文を書くことを現段階で要求することは酷であろう。アルカラ氏自身が、日本語の学習者としての経験を持ち、フィリピン語の母語話者でもあるという利点を活かしながら、フィリピン語を母語とする学習者のために、日本語の学習項目を再検討し、日本語習得のどの段階で、なぜ、つまりくのかを検討するという研究方法は、今後のフィリピンにおける日本語教育への貢献が大いに期待される。当審査委員会は全員一致で、本論文が博士号を与えるにふさわしい論文であると判断した。